

落語に学ぶ

昨今どこの大学でも、「基礎ゼミ」なる科目が大流行りである。昭和でもご多分に漏れず、英語コミュニケーション学科・国際学科に設置されているし、名称は異なるものの、「基礎ゼミ」に類すると推測される科目を置いている学科はいくつかある。それだけ、今の大学生に「学問する」ということの基盤が欠けている表れなのであろう。たしかに、授業中に学生の様子をうかがっていると、ノートを取ることはおろか筆記具も持っていない学生も目につく。逆に、板書された文字を一字一句ていねいに写し取ることにのみ時間を割いている学生もいる。また、文章の要約は下手ではないが、的^{みち}外れの徑に踏み込んでしまう。和訳をさせると、辞書の訳語をそのまま用いてなんと珍妙な日本語を作り上げてしまうし、自分の意見を求められるとしどろもどろになって何も言えなくなってしまう学生は非常に多い。

少人数クラスの「基礎ゼミ」では学生一人一人に目が行き届くので、こうした点に多少なりとも目を開かせ、人前に出ても恥をかかないように自己改善を図らせることができると思われる。40名・50名の大人数ではなかなかできないことである。教育というのは、^げ実に、金のかかるものであると言わねばなるまい。経営効率が悪^いからと少人数教育を見直し……、おっと筆が逸れた。

寄席や独演会で落語を聴く機会が多いが、古今亭志ん朝のお弟子さんで、現在活躍なさっている噺家さんに何度かお話を伺ったことがある。好きで入門した落語の道とはいえ、噺家として一本立ちするのは容易ではない。初めの頃は師匠に教わった話を、大きな声ではっきりと喋る稽古だそう。もしも内弟子になれば、師匠の身の回りの世話から家の掃除など、あらゆることをこなさねばならない。前座（一番下っ端の噺家）になれば、寄席での修業が待っている。太鼓を打ち、電話番をし、師匠たちに湯茶を出し、着替えを手伝い、座布団やメクリ（出演者の名前の書かれた紙）を返し、ネタ帳をつけるなどなど目の回るような忙しさの中で、人との付き合い方や、自分の飛び込んだ世界のしきたりを覚え、それとともに師匠方や先輩の落語を聴き、噺を盗みつつ稽古する。芸事一般に「盗む」とはよく言われることだが、学問の道も同じことが言えはしないだろうか。

噺を覚えることと、真似をすること、これは基本中の基本だ。けれども、それだけでは人に領いてもらえる芸【学問】にはならない。些細なことでも、一つ一つ確かめていく。しくじりを恐れずに自分らしさを求める姿勢、言い換えればオリジナリティを出すことが必要になってくる。教わったことをそのまま鵜呑みにするのではなく、自分で咀嚼してみる。「先を見通して自分で考えながら行動する」という、至極単純そうなことなのだが、身につけることはなかなか難しい。何度も間違えて叱責されたり、うまくできて天狗になったりしつつ、何年かの間に少しずつでも進歩の跡が見られれば立派なものだ。

長い人生のうちで、どのような状況下におかれてもきちんと気働きをさせ、投げやりにならずに自分の進むべき道を選びとれるような学生が、4年間の大学生活で育ててほしいものである。

こんな取りとめもない文章を書いていると、「巻頭言」のお天道なること必定である（?^?）。（まみ）